



H 2 1 年 1 月 2 2 日

さくしん

下氷鉋小学校

(校長室だより 9)

校長 大内 徹

三学期が始まり二週間となり、一月もたちまちのうちに下旬に入りました。「一月は行き、二月は逃げ、三月は去る」とよく言われますが、まさに月日のたつのははやいものです。始業式では、今年の干支である「丑」について子ども達にお話しました。動くのはゆっくりでも確実に前進していく「丑」を見習って、私たちも毎日一步一步努力しながら着実に歩いていくことができればいいなと願いました。

さて、つい先頃ごろ雪が舞った朝のことでした。降雪による道の混雑を避けるべく、家を出る時から私は気がせいとおりました。七時前に学校に着いてしまい、正門脇の横断歩道に立つまでにはまだ時間があったものですから、校長室でお茶を飲みながら新聞を読んでいた。すると、新聞の角が茶碗にあたり、茶碗がひっくり返りお茶がこぼれて机に広がってしまいました。慌ててかわいた雑巾でこぼれたお茶を拭き取るという始末でした。「しまった！ 朝から何を馬鹿なことをやっているのだろう」「朝からついていないぞ・・・」と独り言を言いつつも、「待てよ、それでもいいか。雪道でスリップして他の車に接触したわけでもないし、それに比べればたいしたことはないな・・・」と自分を慰めました。そして、机の上に生じたちょっとした出来事も、これまた、私への何らかのメッセージなのかなとプラス思考で考え直しました。

茶碗やコップのような容器は底が固定されて安定していないと、すぐに転がってしまいます。人間も同様かなと思いました。足腰をしっかりと鍛え安定したものにしておかないと、ちょっとしたことで腰砕けになって倒れたりころがったりしてしまいます。「体や心の基盤、そして生活（習慣）の基盤はだいじょうぶかい。地にしっかりと根を下ろして、落ち着いた生活に努めろよ」という自分自身に対する戒めとして受け止めました。

こぼれ話ついでに、先ほどの茶碗やコップの話にもどりますが、ひっくり返ったままのカップにどんなに水を注いでみても、水はたまりません。水で満たそうと思えば、かならずコップを上向きに立てなければなりません。ごく当然のことなのですが、このコップを子どもの心に置き換えて考えてみました。コップすなわち子どもの心の状態が、注がれるものに対して上向きになっていなければ、どんなに注ごうとしても、コップすなわち子どもの心の中に水は入っていないのです。では、子どもの心のコップを上向きにするにはどうしたらよいのでしょうか。まずは、認めて褒めてあげることでしょう。自分がどんなによいことをしたつもりでいても、どんなに頑張ったつもりでいても、周囲による認め方や褒め方が十分でないと、子どもの心のコップは上向きどころか、下向きに伏せてしまいます。時には入り口を閉ざしてしまうことさえあります。また、コップに水を注ぐ人（親、教師、指導者）とコップ（子ども）との（位置）関係も大切でしょう。物理的距離や心的距離が近すぎても遠すぎてもいけないでしょう。コップの周りの状態や環境も大切になってくるでしょう。このように考えてみると、基本的な生活習慣の躰（しつけ）も含めて、子どもの成長にとって、私たち大人が果たさなければならぬことは沢山あるのだなと気づかされます。昨日の掃除中、5年生が北校舎の脇の側溝をきれいにしてくれていました。ふと道の方に出てみると、流れのない用水路に牛乳パックとペットボトルがあるのに気づきました。私がどぶさらい用具ですくい上げようとしていたら、女子のAさんがさり気なくさっと手で拾い上げて片付けてくれました。心のコップが上に向かっていく状態だなと大変うれしく、すがすがしい気持ちになりました。我が家にも高2の娘がいるの

ですが、彼女のコップは上を向いているのかな、どうなのかなとふと考えてしまいました。娘をすっかり学校や妻にお任せにしてしまっている私ではありますが、父親として何ができるのかなと考えさせられるこのごろであります。また、学校においては子どもたち一人ひとりの心のコップの向き具合はどうなのだろうかと更に心を配っていきたいと思います。

今朝、舎内をまわっていると、3年生の教室の壁には、お面が飾られていました。それぞれの作品に「らしさ」がにじみ出ており、一つひとつ顔にかぶって付けてみたい衝動にかられました。廊下には書き初めが飾られている学年もありました。5年生のある教室には織り染め模様のついた習字紙に筆で自分の目標や願いとする文字が書かれて飾られていました。どの子ども新年に向けての願いや目標をいだいて、それに向かって進んでいるに違いないと思いました。

「さくしん8号」でもふれました、3年生のけん玉もだいぶ上達していました。1年生の独楽もよく回っていました。子ども達は知らないうちに知らない所で練習を重ねて腕を上げていることに気づかされます。子どものコップには水が少しずつたまっているんだなと実感いたします。コップから水が溢れ出てこないうちは、私たちはそのことに案外気づいていないのかもしれない。それどころか、子どもが努力していても、目に見える成果が出ないからといって、大人が感情的になったり、いろいろ口出ししたりしがちです。それは子どもにとってとても辛いことです。即、インスタントな成果を求めることなく、私たちがやるべき子どもへの働きかけを淡々と続けることが私たち大人に求められる態度でありましょう。

私事で再三恐縮ではありますが、正月の二日に45年ぶりに行った私自身の小学校時代の同級会には、73歳になられた恩師にがおいでいただきました。出席確認として恩師から名簿順に私たちの名前が呼ばれ、返事をしながら会は始まりました。昔友達から「おまえは遊びの名人で、そこらじゅう遊び回っていたぞ」と言われてしまいました。通知表には「努力が足りない」と頻繁に書かれ、親には「最近全く勉強せずに困ります。どうぞよろしく」と、担任への通信欄に書かれていた私でした。振り返ってみると、諸事情で、時には私の心コップも伏してしまったり、不安定に揺れたりしながら学校時代を経てきたことが思い出されます。しかし、今現在元気でいられるのも、言葉には出さずとも、子に寄せる温かな親の願いや愛情があったからこそと、心からありがたく思うのであります。

今回もいたずらに駄文を連ねましたが、ここで最近読んで共感した詩を一編ご紹介申し上げます。

昨日（21日）から給食が再開されました。お家の方々には連日おかずをご用意いただきありがとうございました。学校においでになられたあるお母さんは、「今回の給食休止により、給食のありがたみを痛切に感じました」とおっしゃっていました。本校へはABNの取材もありましたが、取材に応じた子ども達の言葉の端々に、用意して下さるお家の方々のご苦勞への感謝の心が感じられました。食の安全、健康管理の大切さ等についても改めて考えさせられる機会ともなりました。給食センターで毎日給食づくりに携わっていらっしゃる方々に対しても感謝しながら、昨日はカレーをおいしくいただきました。お家でも「食」を通して、様々なことを考えさせたりして学ばせたりして、温かな親の愛情でこれからも我が子をつつみ育てていただければ幸いです。

「水のころ」

高田 敏子

水は つかめません
水は すくうのです
指をびったりつけて
そおっと 大切に —

水はつかめません
水は つつむのです
二つの手の中に
そおっと 大切に —

水のころ も
人のころ も